

伊吹山

なだらかな広い頂上を取り囲むように
ブナ林が広がり、平坦な山頂がなんとも
いえない優しさを感じさせてくれる。
土小屋と瓶ヶ森のほぼ中間点であり瓶ヶ
森林道からすぐに稜線にとりつくことが
できるのもうれしい。
石鎚山や瓶ヶ森、筒上、手箱など360度見渡
せる大パノラマ展望とブナの天然林の美しさ。
特に厳冬期の霧氷が素晴らしい。

ブナの木はサラの木と
違って材が柔らかく役に
立たないから「無尊(ブナラ)
と呼び切り倒したら短期間で朽ちる
ことから「無」と書く説がある。
四国の一部では「オモ」呼ぶ。
「オモ」は母を意味する朝鮮語に由来し
この木を「森を育てる母なる木」として
親しみ尊んだゆえの言葉であると
する説がある。

岩黒山とまんなかに
見ながら一休み

この山系で
最も美しい
ブナ林だ。

林道沿いは
見事なブナ林。
ブナラやグンギ
などの山系で
最も美しい
ブナ林だ。

手箱、筒上、岩黒を
真正面に見る。

霧氷は気温が上がると
すぐに落ちてしまう。
美しく儚ない氷の華だ。

山を歩いた感動や感激は心に強く残るとして
山を下りるとあっというまに通り過ぎてしまう。
それとその思いは過ぎ去った日に刻みながら
同時にずっと先の未来のどこかで待っていて
くれるのかもしれない。
ある時ふと思いつき出し、その時の情景や思いを
たどることができるといことは、とても幸せな
ことだと思おう。

いっしょに体験を重ねて、心の中の書架を
いっぱい増やしていきたいな。
初雪山たまりに美しさだ。
一面の霧氷の美しさに感激!!

の記憶と思考の全てが
脳にある。容量は100ギガとスマホ2千個分とか。
読書あり



至土小屋

至長沢

伊吹山から開けた太平洋側を眺めると
四国山地の主稜線から数多くの支稜
が連なり重なり南へ向かっている。
土佐の多割は山地。
ここからの眺めは土佐が山の国と
いうことも像徴する風景だ。

シラサとは、笹の枯れた状態と
「白笹」ということからシラサ峠
と呼ばれるようになったのでは
ないかと考えられている。

瀬戸内側がすぐ近く
に見える。
しまなみ海道も。

葉を全て落としたブナの
大木を真下から見上げ
てみる。
毛細血管のように張り
巡らされ、自由に光を
求めて伸びている枝や幹
がまるで空に向かって舞っ
ているように見える。

寺川から西条市西之川に続いている道。
昭和初期、西之川にバスマン屋が
開業したことで伊勢へ出るより近いとい
うことで越前門や寺川の娘さんたちが
シラサ峠を越えて西之川へ往復し
という話が伝わっている。
(土佐の峠風土記)

ブナで覆われたシラサ峠。藩政期には木材を
運ぶ人々があり、明治中期になると、白猪
谷銅山が開発され、精錬された粗銅は
人畜でシラサ峠を越えて西条まで運ばれた。
行きは食料を背負い、帰りは百斤の粗銅を
背負った人々が陸続と行き来したとい
う。また、精錬のための製炭出稼も峠を
越え、人の出入りが多かった。
(高知の森林より)

昔の人が汗して越えていた
峠には喜びも楽しみも
悲しみも喜びもたくさん
の思いが込みこんでいることだろう。
今は越える人も少ないか
けして忘れられはならない
磨かされてほしい場所
だと思おう。

ゆっくりと深呼吸して
シラサ峠を登り始める。
凍りついたような冷た
い空気で肺の中が清
たされていく。
雪と氷とスパイクが唾む。2024.3.3
一歩一歩、確実に登っていく。

白く凍った
子持権現山か
がこいいい。

ブナ、ダケヤナギ、ハリギリ
落葉広葉樹は優しいな

昔は風境西小屋と呼ばれていた
しらす遊難屋
2007建造

雷柱
カキヒキリ33

高知の山は標高が高い
落葉広葉樹林帯から
中間層がなくなり、
スギと人工林にありスギ林
変わっている。

シラサ越えの峠道とれ、くりに
とどいていく。はじめは人工林の中
とどいて、やがてわさび田跡と
過ぎると明るい落葉広葉
樹林に入り高度を上げていく。

四国山岳碑

ミラサ峠
(1406m)

伊吹山入口

ふたつわがりにくい
マシ注意の看板が目印

ブナの天然林

瓶ヶ森4.4km
土小屋4.0km

伊吹山

霧氷に覆われた原生林の
樹林を歩く。
一面の銀世界の美し
さに夢中になる。

石鎚山も
瓶ヶ森もはるり

落葉広葉樹林の
やさしさ、やわらかさ。
水をたくわえる
源流域にあると
かけがえのない価値
がある。

この雪がゆっくりと
ゆっくりと腐葉土の
中にしみこんで、
土の中で磨かれて
吉野川の流れに
なっていく。

かいたまに越え
スライフィン
始まりとせ
昭和四十四年六月
高知市林務局長
一

よさこい峠

日が昇り
ゆるむ霧氷と
青い空

稜線は景観とあるとして
太平洋と瀬戸内海の
分水嶺でもある。
わずか数十メートルの差で
水の旅のルートが大変。
分水嶺を意識して歩くと
自分の足跡も大なり
小なり分水嶺を越えて
今があるゆえに考えてはう。

山を歩いた感動や感激は心に強く残るとして
山を下りるとあっというまに通り過ぎてしまう。
それとその思いは過ぎ去った日に刻みながら
同時にずっと先の未来のどこかで待っていて
くれるのかもしれない。
ある時ふと思いつき出し、その時の情景や思いを
たどることができるといことは、とても幸せな
ことだと思おう。

No.146



2024.3.3